

Title	＜翻訳＞ グリーンランド民話(三編)
Author(s)	岡田, 令子
Citation	大阪外国語大学学報. 52 p.125-p.131
Issue Date	1981-02-28
oaire:version	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/80837
rights	
Note	

Osaka University Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

Osaka University

《翻 訳》

グリーンランド民話 (三編)

岡 田 令 子

THREE FOLKTALES FROM GREENLAND

Reiko Okada

The following folktales are taken from a Danish text, *ESKIMOISKE EVENTYR OG SAGN*, edited by Ove Bak, published by Nordiske Landes Bogforlag in Copenhagen, 1974.

They are:

- 1) The Child, Who Was Stolen by the Inlanders (p. 63)
- 2) The Journey to the Moon (p. 133)
- 3) The Offspring of the Woman and the Dog (p. 152)

and translator's comment is added to each tale.

はじめに

ここに選んだ三編の民話は Ove Bak の編集した *ESKIMOISKE EVENTYR OG SAGN*, NORDISKE LANDES BOGFORLAG, København 1974, よりとったもので、デンマーク語よりの翻訳である。

民話の蒐集に力があつたのは、南部グリーンランド検察官であつたデンマーク人 H. J. Rink (1819—1893) で彼は1858年、お布令を出して島に伝わる民話を集めて書き下させ、Godthåb でデンマーク語とグリーンランド語で印刷、海岸の各地住民に配布させた。グリーンランド語からデンマーク語への翻訳は Rink 自身と、この島で生れた彼の妻 Signe、及び Godthåb 師範学校教師 Rasmus Berthelsen の努力の結果である。

Rink はそれから8年後の1866年、故郷のコペンハーゲンでデンマーク語版を世に出した。

今回訳者が使用した上記のテキストは、この Rink の初版、同 Supplement, Copenhagen, 1871、その他から編集されている。

最後に翻訳三編に読後評をそえた。

1) **Barnet, som blev røvet af indlandsboerne.....63**

1．奥地住民にさらわれた子供

ツンネールークという名の男がフィヨルド（入江）のほとりに住居をかまえていた。夏はトナカイを捕りに奥地へ入ったが、大てい豊かな獲物に恵まれた。冬はフィヨルドの入口で獲物をつかまえた。

ある夏、彼はまたトナカイ猟に出かけた。その留守中、妻は彼らのたった一人のかわいい息子連れて苔桃を摘みに行った。息子を下において、しばらくそのそばを離れていると、泣き声が聞こえたので走って戻ってきたが息子の姿はなく、遠くの方から泣き声がするだけだった。

彼女はひどく悲しい思をして家に帰って、息子は奥地住民にさらわれてしまった、だから夫の怒りがこわいと告げた。そうこうするうちに夕暮になってツンネールークが大きい獲物を背に帰ってきた。

“でっかいトナカイを持って帰ったぞ、”

と叫ぶ声が聞こえた。しかしテントの中から誰も返事をしないことに気付いた彼はすぐ、何か悲しいことがあるなと思った。急いで家に入って、息子はどうした——ひょっとすると死んだのでは——と尋ねた。妻は答えず、他のものたちが、

“おまえの子供は奥地住民にさらわれてしまった、”といった。ツンネールークは、恐ろしさに震えている妻に、靴の底を縫いつけるようにいいつけ、占い師の従兄を訪ねた。占い師は子供の居場所はどこかいいあて、一緒に取り返しに行くことになった。

二人が奥地深く踏み込むと、大きな家が一軒みつかった。すると占い師は、そこからはツンネールーク一人で行かなくてはならない、自分は帰るといった。ツンネールークは家のそばまで行き、窓から覗き込むと、泣いている息子を奪い合っている二人のきたない女が目に入った。彼はすぐさま家の入口に通じる道にとび下りたが、入り口が高かったのでよじ登らなければならなかった。這い上って息子を奪い返そうとした。だが一人から取り返そうとすると、もう一人の女に渡す、何度かそんなことがくり返された。

やがて大男が一人、家に入って来て、ツンネールークに、自分は海岸住民の子孫だから手助けをしてやるといった。

“おまえは先に走れ、わしは子供を連れて後につづく。それ急げ！ わしの国のやつが今にも追いかけてくるぞ！”

といった。ツンネールークは急いでかけ出した。自分の家のテントにたどりつくと大男が子供を連れてすぐ後に来ていた。

“さあ、大急ぎでテントをたたんで逃げろ！”

と大男はいった。

すぐさま彼らは水面にボートを浮かべ、荷物を積み込んだ。陸から離れるやいなや追手が見えてきた。

奥地住民たちが海岸にたどりついた時、ツンネールークはカヤック（皮舟）の中で向き直り、追手の一人をモリで殺した。そして家族ともども連れ立ってフィヨルドを去った。

その後、息子の具合が悪くなった。それである占い師を呼んだが、病気の原因をつきとめることはできなかった。それで太鼓をたたくのが上手だという他の占い師を呼びにやった。この男は呪文をとなえて仰向けになり、息を止めてまた立ち上り、息を吸い込んでいった。

“子供の魂は奥地住民のところにある！”

みんなはいった。

“火の玉になって、その魂を取ってきてくれ！”

その占い師は奥地住民のところに行き、子供の魂を取り返した。彼が帰って来た時、子供の声はか細くなっていたが、魂を入れてやると元気になった。

“これから困ったら助けてやろう”と彼はいった。ツンネールークは鯨の脂身や肉やトナカイのあぶらを贈って十分な礼をした。

しばらくたったある日、見知らぬカヤック二艘がツンネールークのところへやってきた。彼らが近づくと、一艘には大きな鯨のヒゲが積んであるのが見えた。二人の男たちは、勇敢なツンネールークが奥地住民から息子を取り戻したという噂を聞いて彼をからかうためにやってきたのだった。

二人はいった。

“ツンネールーク、おまえの手柄話をちょっとしてくれ。そうすりや、鯨のヒゲをやるぜ。”

“そんなものはいらん！”

ツンネールークは答えて、二人にセイウチの牙と鯨のヒゲの沢山入った食料倉庫を見せた。すると二人は何もいわず、家へも入らずにすぐそこを立ち去り、再び彼を訪ねてくることはなかった。

（奥地住民に関する伝説より）

2) Rejsen til månen.....133

2. 月への旅（後半）

.....

またこんな話も伝えられている。子供を産めない一人の妻が、夫になぐられたり、ひどい扱いを受けるのでいつも目のあたりがどすぐろくなっていた。

ある冬の晩、彼女は澄み切った月の光の中へ水汲みに出たが、バケツで水を汲み上げようとした時、誰かがそりでやってきて、一緒にのるようにさそうのが聞こえた。彼女が腰を下すとまるで上の方に持ち上げられるように思えた。しかし、つばをはく度にそりは地面にぶつかった。すると彼女の従者はつばをはいてはならぬといった。それで彼らは空に昇りつづけたが、その後から炎がついてくるのがみえた。

ついに彼らは一軒の家へやってきた。そこでこの従者は彼女に横になるようにいい、彼女は意識を失った。意識がもどった時、月の精のところにいる。丁度（この物語の前半にでてきた）カナックと同じようになった。月の精は最後に彼女に告げた。

“さあ、降りてゆくのだ。家に帰ったら息子が生まれる。誰よりも早く家から出ると玄関前の道に小さな海さそりが数匹いる。それを呑み込むのだ。他の物を食べる前にだ。息子が大きくなったら、ある朝おまえが目覚まして、誰よりも先に外に出る。すると息子のための小さな子供用モリが見つかる。子供は私のところへ連れ戻すが、悲しんではいけない。”

そうして月の精は床の板戸を開け、彼女をつき落した。それと同時に彼女は意識を失った。気がつくと地上に戻っていた。自分の家の方へ歩いてゆくと、幾人かの女たちがいて、テントの内側の皮を縫い合せていた。彼女は自分の帰った証をしようとしたが、誰の目にも見えなかった。それで、一人の女から縫針を取り上げると、その女は目を見上げ、彼女が帰って来ていることがわかった。丁度、冬が去って今また春が見えてきたかのように。そこで彼女は夫のところに戻ってみごもり息子を産んだ。まさしく、月の精が彼女に告げたとおりのことがおこった。

ついに彼女がモリを見つけ、それを息子の玩具にさせると、息子は消え去ったが、彼女はそのことで悲しく思うようなことはなかった。
（‘種々の想像の世界’より）

3) Kvindens og hundens afkom 152

6. 女と犬とのあいのこ

ある男が娘と一しよに冬の居住地に住んでいた。娘は犬を一匹飼っていたが、どこへ行くにも犬と一緒にだったので、父親もとうとうあやしいと思うようになった。

ある時父親は皮舟^{カヤック}で出かけたが、家から少し離れただけでまた陸に上って物かげに身をひそめていた。その時、犬が娘について外へ出たこと、彼らは夫婦であることを見とどけた。家に帰っても何事もなかったかのように振舞い、父親もその事にはふれなかった。

しばらくたったある日、岩山へ出かけていた娘は真青な顔をして戻ってきた。犬の仔を産んだからだった。よそから野いちごを摘みにきていた数人の女たちが産声をきいて近づいてみると、仔犬たちが岩の上でねていた。彼らの脚は犬の脚で、体は人間の体をしていた。子供たちの祖父は、それでも彼らを家に連れ戻らせて育てた。彼らが大きくなってからは、祖父がカヤックで帰宅すると、いつもいうことを聞いて手助けをしていた。ところがある日、母親は彼らにいった。

“おまえたちのおじいさんが戻って来たら、おじいさんを食べておしまい！”

彼らは母親のいいつけ通りにした。祖父が戻った時、彼らは陸で手を借したが、そこで祖父を引きさいて食べてしまった。母親は、今度は五人に向っていった。

“おまえたちは奥地へ行って、自分で食べてゆくのだよ。”

他の五人には古い長靴の革底を与え、それを水の上に浮かべていった。

“おまえたちは海へ出て、自分で食べてゆくのだよ。”

そこで彼らは革底に乗って陸地を離れると、その革底は大きくなって一そうの船になった。

海に出たものは“カルナック”になり、奥地に入ったものは半人半獣^{エキリーク}になったということである。
(‘逸話と物語’より)

訳者解説

1) 奥地住民にさらわれた子供

これは、海岸から遠く入った奥地に住む異民族に、息子をさらわれた海岸エスキモーの父親が、呪術師の助けを借りて勇敢にその子を奪い返す物語である。

この物語をよんでいると、彼らの生活の基調となっている自然環境や、その中で営まれる彼らの日常生活——衣、食、住に関する具体的な状況を手にとるように見ることができる。

彼等の平和で単調な日常生活を突然破った一つの出来事、正体のよくわからない、多分自分たちに対して悪事のみを働く奥地の住人に子供を盗まれるというハプニングを通じて、彼らがどのようにその事件を処理してゆくかがうかがえるのである。そこには呪術師という存在があり、それが子供の居場所を告げたり、病気の原因をつきとめたり、姿を変えて空を飛んだり、置き忘れた魂を取りにいったり、またそれを子供の中に入れて病気をなおしたりする。これは想像の物語というよりも、エスキモーの現実生活の中にみられる一つの儀式的描写であるのかも知れない。呪術師の呪文、彼のたたく太鼓の音、恍惚状態になった人々の様子、彼の息づかいまでが聞こえてくるようにリアルな描写がなされている。

この物語には、その他種々の面白い要素が入って来ている。例えば海岸住民の子孫と自称する奥地住民との混血と思われる男が、大男として登場し、それが主人公に味方をするといったこと、また、物語の最後の部分では、主人公が息子を奪い返したという偉業を、からかおうとする、世間によくあるタイプの人間が、二人の男として現れてくることなどである。これは物語の本筋からはそれた部分と考えられないではないが、興味あることは、立派な食糧のつまった貯蔵庫は、すべてよからぬ心をもって主人公に迫ってくる者を追い払うのに何よりも力があつたということである。主人公はすべての点で申し分のない男性であり、物語は無事ハッピー・エンドに終るのであるが、氷の中に一年の大半とじ込められて、厳しくまた単調な生活を送る人々が、海にでて獲物を勝ちとるというすごい威力を感じさせる一人の英雄をつくりあげ、その中に彼らのあこがれと願望、超能力を求めている姿がうつし出されているとも考えられる。

2．月への旅

子供のない夫婦が月から子供を授けられその子供が成長すると、また、月に連れ戻されるという話は、われわれが幼い時から親しんできた物語の中にみられるテーマの一つである。

今ここで「月への旅」を読んで、われわれとは全く異なった土地に住んでいると思われるエスキモーの世界にも、このテーマが現れてくることを知らされて非常に興味深い。

この物語を通じて、われわれ人間はいつに住もうと、常に持ちつづけてきた、生殖についての基本的な関心事を、エスキモーの間ではどのように考え、理解していたのかを知ることができると同時に、古来、女性の内的な体験と、月との関係が如何なるものとしてとらえられてきたかという点をもうかがい知ることができるのである。

古くから月が象徴する意味は実に多様であるといわれている。同じテキスト中にも、兄と妹が天に昇って、兄は月に、妹は太陽になったという話——solen og månen「太陽と月」——がでてくるが、この「月への旅」でも、月は男性であるが、月は女性にもなるし、また時には両性具有をも象徴するという。実際に月の満干が人間の生命にとって大切な出来事——出産や死に深い関係があるばかりではなく、われわれ女性の体内におこる周期的な変化が、月と関係していることはよく知られている。

この物語では受胎と妊娠、そして出産、出来てきた子供との関係など、女性の肉体的な経験のすべてを月が司っていると考えられていたことがわかる。妻にとっては、“夫との性生活は直接、彼女の受胎と連がっていない”とする心の発達段階——意識が無意識から独立していない段階——では、夫、すなわち男性との肉体関係は、現代人の考えるように、個人的な愛情の結果ではなく、社会的なものとして体験されている。したがって、人間がこのような心の段階にある時には、女性の肉体的な体験はすぐ彼女の内的な体験とは結びつかないのであって、妻と夫との関係は全く非個人的なものであり、月との体験——月に投影された自然現象——としてとらえることになるのである。だから、この物語では、女性が無意識の中に月との一体感を経験していることが明白に示されているのである。

3．女と犬とのあいのこ

自分と子供たちを扶養しつづけてくれた恩人ともいうべき父親を、子供に殺させて彼らが、一人前の大人になるように命令して、新しい土地へ送り込む恐ろしい母親の話である。エスキモーの世界では食物の供給者は常に男性であるから、その父を殺させた者自身も、やがては餓死する運命をまぬがれないのであるが、それにもかかわらず、母親は新しい生命が独自の力で生き抜き、成長してゆくために、非常に厳しい方法をとっている。これはグリーンランドという地域差

があるとは思われるが、生命が生き続けるためには、如何に残酷なまでの厳しさが要求されるかということを示しているのであろう。

一方、子供たちの父親が犬であるということについても、現実には、その地の生活には犬がなくではやっていけないものであるという事実は別としても、人間と動物や自然が完全に融合して生きる姿が、この人間と犬の夫婦という形で象徴されていると考えることもできる。また、この物語にでてくる半人半獣という姿に、われわれ人間のもっている内的な二面性—人間的な性格と動物的な本能—が象徴されているとも考えられる。

足を踏み込むことが全く不可能であった内陸深くには多くの妖怪変化が住みついているとエスキモーたちは考えていたのであろう。小人や巨人がいるかと思うと、6本脚の動物や、この物語に出てくる半人半獣が、彼らの物語の世界—想像の世界に登場する。

エスキモーたちが、このような自分とは姿や形の異なった怪物を仲間としてすんなり受け入れることができず、自分たちとは生活を共にすることのできない、何か恐ろしいものとして受け取っていることもみのがせない点である。

「女と犬とのあいのこ」は、どのようにして、“半人半獣”なる生きものが生まれたかを説明しようとする話でもある。